

黒部名水会

会報
第45号

平成25年3月25日発行
黒部名水会



水のある風景 ①9

東布施地内を流れる布施川
後ろの山は烏帽子山 (1,274m)

この一年を振り返って

黒部名水会会長 本多 省三



平成二十四年度もはや終わろうとしていますが、日のたつ早さに驚いています。会員の皆様にとっても同じかなと今この一年を振り返っています。

総会に始まり、年間を通じた名水会公開講座、全国各地への贈水事業、秋の日帰り研修（郡上八幡）、名水茶会などと名水のこれからを考える一年でした。私は都合で行けなかったのですが、全国名水サミットは尾瀬の片品村で行われ、盛会だったと聞いています。私はこれまで尾瀬へは何度か行っており、まだの方は是非素晴らしい尾瀬を一度はと思います。平成二十五年度もさらなる活動が展開されます。多くの会員の方が参加されることを願っております。

開催されていますが、これまで「名水百選」に選ばれた場所をいくつか見てきたか思い出してみますと、大体半分くらい訪問していません。特に思い出に残っている場所を紹介したいと思います。

一番は何と言っても北海道利尻島の「甘露泉」です。十数年前旭川での研究発表が終わり、十月はじめで長男も大学が休みだったので一緒に利尻山（一七二一メートル）に登りました。頂上付近は雪でした。その時は名水のことはあまり知らなかったのですが、登り口の利尻北麓野営場からすぐにあったことをよく覚えています。

今思うと一七〇〇メートルを一日で登ってきたあの厳しい利尻がこの名水を作っているのだと静かに感じ入っています。

東北の月山、養老の滝、九州の阿蘇：全国の名水が待っています。

す。各地を放浪するのも楽しいものです。



山と溪谷社版『日本百名山』より

名水会公開講座

特別公開講座

深層水の活用と

第4回

入善町の水探訪

事務局次長 中村 康昭

黒部名水会公開講座の第四回は体験学習で八月二十五日（土）に開催され二十四名の参加でした。バスにて黒部市民会館を午後一時三十分に出発しました。八月はお盆も過ぎたというのに連日の猛暑

続きで、今日も暑い中での体験学習となりました。

最初に行った所は全国名水百選に選ばれた入善の「高瀬湧水の庭」でした。黒部川扇状地湧水群のほぼ中央に位置し、黒部川右岸の自噴地帯の代表的な湧水です。この湧水は自噴水で深さ約三十六メートルの所より湧き出ていて水温は年間を通して約十一度だそうです。飲んでみるとまさに北アルプスから流れてきた冷たくてまろやかで美味しい水でした。次に訪れたのが、入善町の「水の小径」です。小川を利用して小水力発電をしているところを見てきまし



高瀬湧水の庭にて

た。戦前は各農家でよく使われていたダイロ（らせん水車）を再利用して小水力発電の実験をしています。少しの傾斜でも流れがあれば発電ができ今は実証実験中でした。扇状地には網目のごとく川が流れているので将来はこのような発電の普及を広げてゆきたいと黒部川扇状地研究所の研究者からお話がありました。最後に訪問したのは入善町にあります入善海洋深層水パーク（海洋深層水活用施設）です。海洋深層水とは、光の届かない水深二百メートル以深の海水のことをいい、ミネラル、栄養塩が豊富で清浄という特徴があるということでした。沖合三キロメートル、水深三百八十四メートルから取水し、産業活動に利用しているそうです。深層水は飲み物、食べ物、塩等いろいろなところに活用



入善海洋深層水パーク

第5回

とやまの 河川とダム

講師 富山県 浅水 俊博

されていることがよくわかりました。施設の中で珍しい深海の魚も見る事ができました。また、深層水も口にしてみましたすがにがりがきいた味でした。今回、体験学習で専門の方からの説明を聞いたり見たりして体験したことは大変良い学習となりました。

十月十八日（木）、県土木部河川課計画係、浅水俊博副課長を講師に迎え、吉田科学館で二十七名受講のもと開催された。富山県の河川は一級河川二百十六本、二級河川百一本



ゲリラ豪雨についても説明を受ける

の計三百十七本、総延長は約百六十五万一千メートル、急流河川が多く砂利も溜まりやすい全国でも珍しい県で、急流河川としては全国で上位八位迄富山県が占めている。また、水害との闘いの県でもあったと述べられる。ダムの整備や護岸工事によって水害は少なくなったとはいえ、ここ近年の水害について実例を示しながら説明をされる。特にゲリラ豪雨と呼ばれる集中豪雨に伴う浸水被害に対する、その後の対策等も細かく説明され、洪水に強い河川の整備を着々と進めているとのことだった。主要事業の紹介では、生活貯水池の舟川ダム、全国初の生活提携型の大谷ダム、黒瀬川の河川改修等、県の河川や水への取り組みがよく分かる講座だった。

第6回

安全で おいしい水

講師 富山県 山本 将孝



おいしい水とは名高い水

十一月十五日（木）、吉田科学館で二十二名受講のもと、県厚生部生活衛生課水道係、山本将孝主任より出前講座を受ける。最初に水道の歴史のレクチャー

を受ける。古代ローマや中世パリの泉水、近代では一八〇四年イギリスで、日本では室町時代の一五四五年小田原で、明治に入つて横浜で初のろ過浄水が導入され、明治二十三年には水道条例、そして昭和三十二年に水道法が制定される。富山県では砺波市が最初。富山県の普及率は九三・二%で、自家井戸や湧水が多くある為、全国平均より低い。県内の水

道水源の内訳は、表流水川水が三分の一、地下水が三分の二、また水道料金は西高東低で、黒部市が一番安いとのことだった。飲用井戸水の衛生管理についても説明をされる。

最後に、「おいしい水」と呼ばれる科学的根拠や、「とやまの名水」と呼ばれる六十六カ所についても、安全面だけではなく、古事来歴を有し、名高い水という意味を込めて選定されていると結ばれた。

黒部名水会 公開講座を終えて

公開講座
運営委員長 平田 信康

水と文化のかかわりをテーマとして、今年度も進めてきた。

五月十七日に開講式並びに第一回、小水力発電について（市農林整備課／大藪勝志課長）、六月十四日第二回、水と緑の森づくり（県森林政策課／牧野吉成氏）、七月十九日第三回、水質の環境保全について（県生活環境保全課／木原忍氏）、八月二十五日第四回、現地見学会として、入善町の高瀬湧水の庭、水の小径散策とマイクロ発電の調査実験の見学（黒部川扇状地研究所／吉島雄一事務

局長）、その後、入善海洋深層水パーク見学、十月十八日第五回、とやまの河川とダム（県河川課／浅水俊博氏）、十一月十五日第六回、安全でおいしい水（県生活衛生課／山本将孝氏）と閉講式を行い本年度の行事は終了。その後十二月十一日、公開講座の関係者を交えて反省会を行った。

受講者数は平均二十六名であり、六回全部受講から一回だけの人迄、合計六十二名。毎会の参加者総数は百五十二名となった。昨年と対比すると、平均二十九名、参加者は七十名、総数は百七十名であり、いずれも減少となった。

参加者名簿六十二名中、会員外が二十六名であり、公開講座の意が保たれたと思う。また、参加者は市外にも及び、会員外でも熱心



冷たてうまいのう～

な人もあった。

今後の方向としては、参加者に三十名位確保し、その為に演題に魅力を持たせ、その他、参加者の少ない宇奈月方面の方々にも呼びかけをする。

今後も会場は吉田科学館、講師は県の出前講座を主体とする。

平成25年度 公開講座

各講座は13時30分より

- 5月16日(木) 黒部市民会館 剣岳とその北の山々
講師/佐伯 邦夫氏
- 6月13日(木) 吉田科学館 立山の自然を守る
講師/県自然保護課
- 7月17日(水) 吉田科学館 明日を拓く新たな農業技術
講師/県農業研究所
- 8月17日(土) 魚津市 東山円筒分水槽ほか
(黒部市民会館前集合)
- 10月17日(木) 吉田科学館 豊かな海づくり
講師/県水産漁港課
- 11月14日(木) 吉田科学館 立山カルデラにおける砂防事業
講師/県砂防課

日帰り研修

◎10月28日(月)
北陸の小京都、越前大野と紅葉の九頭竜湖を訪ねて

地下水の守り人

養成講座実施される

主催/財とやま環境財団・富山県

県下62名中、黒部名水会員

7名が認定!

平成二十四年秋、財団法人とやま環境財団と富山県は、貴重な水環境を次世代へ引き継いでいく為、名水・湧水の保全や消雪設備の節水等の地域に根ざした、地下水保全に関する基礎知識の修得を目的とした養成講座を開催しました。

地下水の守り人とは、地下水の保全に関心を持ち、ボランティアとして自ら地下水保全活動に主体となって取り組む方で、三回の講座を受講し、修了者として地下水の守り人バンクに登録された方です。活動区分は、消雪設備の節水と、名水・湧水の保全の二つの区分に分かれ、それぞれの活動をします。
第一回 九月十五日(土)
県民会館で開催。一、開講式、二、地下水の守り人について、三、富山県の地下水の現状と保全の取り組みについて、四、地

庄川と長良川の分水嶺へ 日帰り研修

我がふる里の奥は水清し

山口 直次

黒部名水会恒例の研修旅行は、私のふる里「五箇山」の上流岐阜県ひるがの高原の分水嶺公園から豊かな水にたたえられた城下町「郡上八幡」を訪ねる旅であった。私は今年度はじめて入会し、最初の活動が黒部名水ロードレースの給水担当であった。ゴールでの給水では多くのランナーから黒部の水のおいしさと、真心への感謝の言葉が述べられた。このとき名水会に入会してよかったですと実感した。

さて会報第44号で研修旅行の行程が掲載され、佐竹事務局長に「おらみたい今年入ったのもので、行ってもいいがけ」と遠慮がちに尋ねると、快く「一緒に行かれないか」との返事であった。分水嶺は二十代の頃何度か訪ねたことはあるが錦秋の頃にはなく、心躍る想いでその日を待ちわびた。快晴の秋空は旅人の心を癒しへと導くに十分であった。高速道路を快調に進み、五箇山に近づくと突然事務局長からの「山の暮らしてもしゃべってよ」との声に新参

者はやや躊躇し心が乱れたが、意を決して話すことにした。名ガイドに負けないようにと富山弁・五箇山弁・金沢弁をませこぜにしなから「結いと信仰」について語った。語り部の役を終えた後の拍手から「新人上手やったぞ」と先輩の声が聞こえたような気がした。

さて、開拓者が切り開いたひるがの高原は夏は避暑地、冬はスキーヤー等の多くの観光客で賑わうが、分水嶺公園を訪れここが日本海と太平洋に水を分け与えている位置であることを知る人は少ない。公園が整備されたのも水の大切さを後世に伝えるためのものであり、訪れた人はその後継者となることが求められている。

快調な旅は水の町郡上八幡の散策へと続いた。名水百選第一号指定の宗祇水はまるやかであまみが口に広がる水であった。ここでは観光客を引きつける策をかいま見ることができた。宗祇水の周辺整備が水とマッチしていたこと、希望すれば観光ガイドが説明する体



オーイ全員おるか〜い (郡上八幡・宗祇水)

制になっていたことがあげられる。新幹線開業まで間近な黒部市で水を財産とした交流人口の拡大をどのようにして進めるか、課題を再発見することができた。

旅は続き、せせらぎ街道を一路北上すると、山々の紅葉が鮮やかに目に飛び込んできた。156号線は何度か通るが、せせらぎ街道は初めてである。今年の紅葉はここ十年間で最高ランクに位置づけられている。心の洗濯には余りある光景を眺めながら、快適な旅は終焉を告げようとしていた。

この度の企画は、事務局長の事前踏査に始まり、準備万端の中で実施された。すべての会員が満足する中で無事終えられたことに心から感謝したい。ありがとうございます。

下水に関する研究について。
第二回 九月二十九日(土)
 県民会館で開催。一. 地下水保全活動団体の事例発表、二. 七村郷Vセブン委員会 三. 黒部名水会、二. 消雪設備について、三. 現地研修 四. 石倉町延命地藏尊奉賛会の視察 五. 消雪設備の見学。

第三回 十月二十日(土)
 高岡テクノドームで開催。一. 特別講演「地下水の科学」富山県立大学講師、手計太一氏。二. 修了証の授与式と地下水の守り人のジャンパーと帽子の授与。

研修修了者六十二名中、黒部名水会員は、山本憲司、荻野伸広、泉田伊一郎、平田信康、田中義之、高野忍、佐竹信雄の計七名です。



第3回研修会「地下水の科学」

石倉町の延命地蔵の水

支援事業

「水の大切」を理解する活動

名水会副会長 山本 憲司
水の少年団指導者

水は何処から来て、何処へ行くのか、そして水が無くなればどうなるのか、水により生命を保っている地上の生物は人間だけではない等、水の恩恵を心底考える子供が時代を通して育ってくれる、そんな「くろべ水の少年団」も平成四年に結成されて滞ることなく二十年を超えて続いてきた。きつ



黒部川での記念撮影

とここで学んだ学童が、これから活躍してくれる事は間違いない。

一方、今一つ、時の都合で水源となる奥山（立山）へ連れて行けなくなった事は残念である。我々の住む地形や名称を見ても、湯（新潟）・山（富山）・川（石川）など水と深い関わりがあったことが窺える。それだけに有効な地形を教材に、バランス良く指導していきたいと指導者の教師は熱く考えている。

名水会はいつまでも、水を正しく理解する健全な子供が育つ環境づくりを寄与する一団でありたい。

支援事業

第14回モーターパラグライダー

黒部名水交流大会

富山県MPGスカイテック 会長

丸田 信夫

昨年度の大会は、黒部川公園に選手一同集まりながらも雨まじりの天候不良でフライト出来ず不成立。今回は黒部川公園野球場を会場に予定していましたが、公園内

では当日、県内の児童サッカー試合が盛大に行われており、競技の支障を懸念して黒部川上流の東山



水辺公園に会場を移し第十四回大会を行いました。

県内選手の他、山梨県や埼玉県等県外からも選手・スタッフの参加を得ての交流大会となりました。風向きが不安定な中、ターゲット競技が成立し二年後に迫る新幹線開通に伴う黒部のPRになったことと思います。

次回十五回大会からは市内に「黒部名水(株)」を名乗る企業の実現もあり、大会名を「黒部親水モーターパラグライダー交流大会」と改め、更なる黒部川扇状地の素晴らしさを全国に発信でき

本の紹介

〈中部版〉

名水・わき水ガイド

百選

過去に「日本の名水百選」の本も出ていたが立ち読みだけで買わず、大型書店へ行くごとに名水の本を探していたら、二〇〇三年の再版ではあるが「名水・わき水ガイド」中部版百選を見つけ買い求めた。

名所探訪サークルが編集している手帳型の本で、昨年行った分水嶺公園や今秋計画している福井県大野の御清水、富山県では生地の清水他七カ所が載っている。

最終ページには、名水は地域の人々の保全活動によって、おいしく飲めるようになっていて、お忘れなないようにと記されており、私達も他へ行った時は感謝の気持ちで水を楽しみたいものである。

(佐竹 信雄)



2003年 星雲社発売・リベラル社発行
定価 1,350円

ばと思いは尽きません…。
尚、毎回の黒部名水会の共催や
佐竹事務局長にも参加いただき物
心共々のご支援に感謝申し上げます。

大会成績

- 1位 寺島敏明 (南砺市)
- 2位 安木栄二 (滑川市)
- 3位 北村孝敏 (南砺市)
- 3位 金沢武久 (山梨県甲府市)



山梨県や埼玉県からも参加

支援事業

秋の名水茶会

副会長 橋爪みち子

立山連峰に雪がかかる十二月二
日、コラーレで黒部市茶道連盟に
よる名水茶会が開催されました。
名水会からも十名が参加し、生地
の弘法の清水を酌む茶の湯の極意
を味わいました。日本茶道学会、
戸坂社中が担当する本席では席主



約300人が一服を味わう
(写真/市茶道連盟提供)

を介し道具を拝見、加賀蒔絵の
棗、筋釜、床掛には龍の世界をし
つらえ椿と榛を生ける美と和みの
芸術に浸りました。

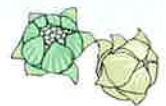
流れは表千家の立礼席に移り短
冊「日々聴松風」を媒竹で飾り侘
び寂びの心を名水で泡点で、薫る
一服を楽しませて頂きました。日
本の雪景色を生菓子に見立て、お
茶のおいしさを全国名水百選黒部
の名水に託した茶会は大盛況に流
れ続けていました。

利休にたざねれば「名水にきく
べし」と。



(写真/市茶道連盟提供)

とやまの名水
ネットワーク
協議会



黒部名水会会長 本多 省三

さる二月二十一日、県主催(事
務局・厚生部生活衛生課)のとや
まの名水ネットワーク協議会が開
催された。この協議会の目的は
「飲用されている「とやまの名水」
の衛生管理及び飲用対策」のため、
情報交換・衛生管理の技術向上等
を目指すもので、関係者四十名あ
まりが集まったの会合であった。

はじめに、富山大学大学院中村
教授の講演「富山の環境 水中の
微生物たち」があり、生物濃縮か
ら始まり、県内河川・富山湾のパ
クテリア群集構造など専門的なお
話があった。つぎに県の方から
「とやまの名水」衛生管理・飲用
対策実施状況、「水源地保全条
例(仮称)」の制定」についての
報告・提案があった。幸い黒部の
各地の名水は問題なく、また水源
地保全条例に対しては是非にとい
う思いである。
富山県の河川を流れる水は日本
全国民の水使用量に相当する。黒

部名水会は水資源の豊富なこの富
山県にあって、また黒部の地に
あって名水の衛生管理・飲用対策
のみならず、ホタルの里、鯉の里
などやすらぎの里も目指したいも
のである。

参加しませんか

カーター記念黒部名水

ロードレースの給水スタッフ

五月二十六日(日)午前中、場
所は名水会担当の七カ所、新たに
参加される方は、四月末迄に荻野
伸広副会長迄 ☎五二二三八一九

高橋川及び箱根清水の清掃

七月十四日(日)高橋川(総合
公園横)は午前中。箱根清水(長
屋地内)は同日午後。いずれも申
し込みはおりません。

編集後記

編集に携わって今回で6冊目の
会報。そろそろ慣れても良さそう
なものだが、自分本来のなまくら
癖は直らず、編集作業をする頃は
いつも暑いか寒いかで、一日延ば
しにし、記者ハンドブックや辞書
を繰りながら原稿用紙を埋めてい
ます。次回は少しは早く机に向か
いたい。(編集子/佐竹信雄)

名水文芸

——水を讃える——

短歌

柴垣 光郎選

白く咲く木樅の花よりなお白く
仏舎利塔に秋の風吹く

山口 桂子

吊り橋にボス猿子猿みな並び
黒部の湯客見送るごとし

河田 稔

今日もまた猛暑日らしも濯ぎ
干すパジャマの花が朝陽に透ける

濱松 睦子

フルートの音色が月かげ織り
なしてモーツァルト祭を月酔うている

西島 敏子

仙台の子より届きし祭酒「が
んばろう宮城」の札が懸りぬ

上野 光子

生い茂る茗荷の薮に自生する
赤き色付く鬼灯が立つ

山口 吉政

休耕田いちめん咲くコスモ
スの花さやさと秋天高し

廣瀬 春美

ひぐらしの声澄みわたり残照
は大地のほてり静かに冷やす

上田 洋一

秋の日の越路の旅に見る翡翠
魔性めく色にこころ惹かるる

石浦 好代

連風に糸ひく子らの夢背負い
竜鳳のごと天空に舞う

東狐 義之

俳句

柴垣 光郎選

新米の三十キロの重さかな

山口 忠行

半山の詩に差す月や松桜開

角井 孝通

日焼けの子あしたの元氣おい
てゆく

高嶋 愛子

笹竹の初鮎ぶらりとどきけり

田村 勝子

蟬穴に羽化への温み落したり

若林 伊義

鈴なりの畑の宝石ミントマト

堀 ちえ

月涼し夕への風に僧ヶ岳

丸田美恵子

布施川の貫きし野辺の曼珠沙
華

内橋はるみ

夜半長く名文月になぞりけり
空を突くクレーンの高さ大根
蔦く

高松 都子

遠足を新幹線でスカイツリー

選者詠

名水物語

(29)

おとせと大蛇

柴垣 光郎

本年は蛇年(癸巳)とも言う。
蛇を神格化した龍(今は
竜・たつ・りゅうという)は
想像上の動物で神霊視されて
いたが蛇は現実にも田畑で
見られる。

この蛇の話が黒部川の洪水
をはじめ扇状地のあちこちに
伝えられている。今回はその
一つを紹介しよう。

○ ○
むかし、荻生中村の徳左衛
門に「おとせ」(お竹とも言
われていた)というきれいな
娘がおった。

このおとせが、三月十八日
に行われている明日の開帳参
りに行った帰り、愛本橋のた
もとで紙に包んだ手拭ひとつ
を拾った。

その手拭のちらしは、大蛇
の愛恋をかいたものだったの
で、珍しくて家に持って帰り
親に見せた。二、三日すると
若い侍が旅装束で、ぶらりぶ
らりと荻生中村に来て、

「中村の徳左衛門の家はど

盆踊り唄

♪
ころは三月十八日よ
明日お寺に開帳がござる

開帳ありやまた参らにやならぬ
開帳戻りの愛本橋で
紙に包んだ手拭拾うた
拾うた手拭のちらしを見れば
愛と恋との大蛇のちらし
おとせ(お竹とも)喜び小袖にし
まい

家に帰ってふた親さまに
見せて二三日たないうちに
若い男が旅装束で
ぶらりぶらりと荻生の村へ
ここはどよと子ども衆にきけば
ここは荻生の中村でござる
荻生中村の徳左衛門さほどこじや
もうちよつとゆかんせ徳左衛門さ
がござる

夜のこととて大門しまる
大門しまれば小門もしまる
大蛇巧者で裏門まわる
おとせおとせと二声三声
おとせおとせと呼ぶものは
夜の夜中にわし呼ぶものは
キツネタヌキの迷いじやないか
手拭落とした大蛇でござる
大蛇様かえやれ恐ろしや
拾うた手拭お返しします

手拭ほしさに来たのじやないが
雨が降ってもぬれない手拭
風が吹いてもたない手拭
それをおまえが拾うたじやないか
いくら深くても二丈か三丈
さあさあゆかんか愛本橋へ
されど皆さん道中は長いぞ……

こうして大蛇の家に嫁入り
したおとせは、やがて蛇の子
をたくさん産んだ。

大蛇は若い娘が好きだった
んだろか。平三郎の娘、お光
も蛇の子を産んで、親子の悲
しいわかれをしている。